

## 神奈川県桐蔭学園視察レポート

県外の先進校視察を通して今年度の研修テーマである「主体的・対話的で深い学び」について理解を深めるという目的で神奈川県桐蔭学園を視察しました。

11月17日(金) 午前中 桐蔭学園視察  
経営企画室長・入試広報部長 佐藤 透 先生が応対して下さいました。

1. 授業参観 ②校時 9:45～10:35 (50分) 中等教育学校(男子のみ)4年生の化学AL授業  
習熟度別クラス最上位クラス  
(文理コースにまだ分かれていない)  
愛知県からも名城大学附属高等学校から2名研修に来ていました。

今日の学習目標(板書にて提示): 大学入試問題を通じて電池電解の基本の重要性を実感する  
前時に鉛蓄電池について学習済み

生徒の活動:

- 冒頭の5分 プロジェクターで「レドックスフロー電池」の映像が流され、画面進行に応じて教師の既習内容に関連づけられた説明を聞く。
- 次の15分 まず、指名された生徒が前時に学習した「鉛蓄電池」の説明をし、皆で確認。次にプラチナを電極にした2種類の水溶液を電気分解するとどうなるか(生成物、反応式、酸化還元反応、電子の動きなど)をペアワークで互いに説明し合う。教師は参考資料ページを板書する。
- 次の15分 本時の目標大学入試問題(東工大)のプリントが配付され、参考教材をしまう。15分間、個々に課題に取り組む。それまでの和やかな雰囲気はなくなり、真剣に取り組んでいた。
- 次の10分 先ほどのペアで協働して参考教材を使用しながら解法を考える。教員はヒントと参考教材の該当ページを板書する。
- 残りの5分 解答解説を配付してもらい、プロジェクターで考え方、解説を聞く。

- 感想 授業の冒頭に本時の学習目標を示し、生徒は何をするかを了解している。生徒もAL形式の授業に慣れていて教師の指示で的確にペアワークに入る。教師はペアワーク中に机間巡視するが、一切生徒の活動に介入しないでタイマーを使ってタイムマネジメントだけしている。生徒同士が自分で考える時間を保証している。また、先取りしているとはいえ、高1で難関大学入試問題に取り組めるという点でも驚きました。

2. 授業参観後は佐藤先生から桐蔭学園のAL導入についてお話を聞きました。桐蔭学園は2014年創立50周年を期にAL導入。2020年大学入試改革を迎える中学1年生から導入。現在、3年目を迎える。講義型授業をやめて考える授業を展開する授業改革の軸としてALを導入。2015年4月から高校1年生にもALを導入している。
- AL導入については英数国の教員各5名ずつでAL推進委員会を作り、ALを実践していく中で周囲の教員を巻き込む形でスタートした。AL授業は常に授業参観できるように開放されており、他教科の教員も自由に参観できる。ただし、ALの強制はしておらず、従来の講義型授業でがんばっている教員もいる。
  - 習得型のALの盲点はAL=発表、ペアワーク、グループワークであると思いこんでしまうこと。授業デザインをしっかり行い、仕込みをした上でAL授業実践に至る。AL授業から逆算し

て授業計画を立てる必要がある。しっかりした授業デザインに基づいたALを通じた output 作業により学力が向上する。まず、講義はしっかり行うこと。次にALでは個で考えさせてからグループワークに進める。いきなりグループワークにはしない。まず、個でしっかり考えさせる。そしてグループワークの後に個の振り返り (reflection) を必ず行わせる。振り返りを行うことで個をカバーできるようになる。

ALは50分の授業の中で20%、あるいは週当たりの授業時間の20%を充てられればよい。

- ALの中で生徒の質問を拾って教師が答えを返せるかが問われる。上位者のALでは質問内容に上限がないので教師の力量が問われる。教師もALでは徹底した予習が必要である。生徒の質問に対してその場で答えられなければ、必ず、調べて後から答えを示すこと。これをしてしないと生徒は質問しなくなる。
- ALを成功させるためには事前学習(反転授業)と個の振り返りが必要。生徒の事前学習が増えれば、生徒の負担増。AL疲れ現象。生徒の自己判断で手を抜く科目が出てくる。ここで必要なのがいわゆるカリキュラムマネジメントで学年団などが事前学習量が過大にならないようにコーディネートすることが必須である。
- ALでは教師の授業コントロール、クラスコントロール能力と生徒との信頼関係が必須である。
- AL推進は組織力が必要。組織で行う。AL＝授業改善と捉える。

最後に昼食を取りながらの懇談の中で佐藤先生は次のようなことを言われました。

☆公立・私立を問わずどの学校もAL、ICT、探究、キャリア教育に取り組み、学校の独自性が見えなくなってきた。私学であるからこそ、建学の精神をベースにした学校独自のALと言えるものを作る。保護者が実感でき、6カ年または3カ年の中で体系づけたAL。様々な教育活動がストーリーで繋がる私学の特徴を生かしたAL作りが大切である。

報告者 静岡聖光学院中学校・高等学校教頭  
天日 智晴